大洲市教育委員会
現地説明会資料　平成25年5月25日（土）

大洲城跡（石垣A箇所）

今回の調査成果のポイント！
①絵図に描かれた建物の発見
②御武具蔵の２つの基礎石列
③御武具蔵の海鼠(なまこ)壁

調 査 名）　城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査
調査期間）　平成24年11月～平成25年1月、3～5月
調査箇所）　大洲城跡　二の丸西曲輪・二の丸奥御殿（石垣A箇所）
調査面積）　約250㎡

調査に至る経緯）

大洲城跡の石垣は、所々において孕み出し、石の抜け落ち、破損が目立つようになり将来的に石垣崩落が予想される箇所もみられます。そのため、大洲市では城内に現存する石垣の遺存状況、破損状況、石材や石積手法等を調査して、来訪者の安全性を確保し文化財としての大洲城跡の適切な保存と管理を図るため、専門家等の指導・助言を仰ぎながら石垣の修理箇所・工法等を検討し、平成23年3月に『大洲城跡石垣保存修理計画書』を作成しました。

そして、平成24年3月5日に「大洲市歴史的風致維持向上計画」が国の認定を受けたことにより、「城山公園整備事業」として事業化され、平成24年度から石垣改修事業を開始しました。『大洲城跡石垣保存修理計画書』をもとに、今回、石垣の破損が大きく早期の修理が必要な二の丸西曲輪および二の丸奥御殿西側の石垣を「石垣A箇所」として、石垣解体前の事前の発掘調査を実施しました。

調査の概要）

発掘調査は解体する石垣の上面を対象として、江戸期の遺構の確認を目的に実施しました。調査区は、上段の二の丸西曲輪を１区、下段の二の丸奥御殿を２区として設定しました。

１区では、明治期以降に数回にわたり盛土がなされたため、江戸期の遺構が比較的良好に保護されており、江戸期の絵図から「**武者走**（むしゃばしり）」「**便所**」「**御武具蔵**」と考えられる遺構のほか、絵図には描かれていない２本の併行する石組溝や、少なくとも２回の石垣の改修痕跡などが確認されました。

御武具蔵については、絵図から２間×10間の規模だったことが分かっていますが、この遺構として２つの基礎石列が確認されました。一つは石組溝②の部分で、溝の側石にＬ字に折れる角部が検出され、さらに犬走(いぬばしり)や雨落ち溝も検出されたことから基礎石になる可能性が高く、石垣南面からの距離もほぼ10間となることから、御武具蔵の北面にあたる部分と推定しています。もう一つは１区南部の基礎石列で、石垣西面からの距離が２間となることから、御武具蔵の東面にあたる部分と推定しています。しかし、これら二つの基礎石は推定ラインが約1m程度

ズレて直線上に乗らないことや、南部の基礎石列については礎石の抜取り痕跡を含めても4間分の長さしか検出されないことなどから、現時点では、最初に2間×4間の御武具蔵①があって、建替えによって絵図にあるような2間×10間の御武具蔵②となった可能性を考えています。

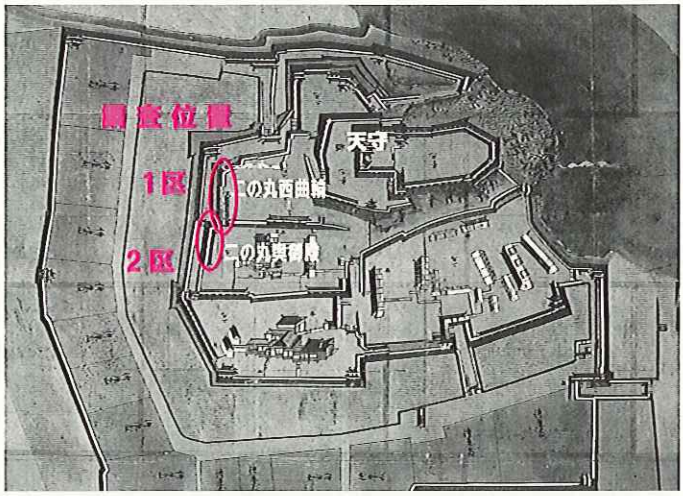


図1 『元禄五年大洲城絵図』(1692年/大洲市立博物館蔵)

2区については、1区とは対照的に明治期以降の住宅建築などにより江戸期の遺構面が著しく破壊されていましたが、一部でその破壊を免れた遺構が発見されました。

絵図から2間×10間半×4間の規模でL字形の「**御長屋**」があったことが分かっていますが、この遺構として川原石を多く含んだ南北方向の溝が確認されました。大部分は抜取られていましたが一部に基礎石が残っており、石垣西面からの距離が2間となることから、御長屋の東面にあたる基礎石で、溝はその布基礎と考えられます。また、玄関部にあたると思われる2区北東部では、踏（ふみ）石の可能性がある平石なども発見されました。ただ、今回の調査では東西方向の基礎石が発見されておらず、また、絵図に書かれた寸法と検出された遺構の寸法に若干のズレもあり、絵図との整合性については今後の検討課題といえます。

出土遺物については、「**海鼠**（なまこ）**壁**」に使用された海鼠瓦が注目されます。絵図で見ると、城内の建物で海鼠壁が描かれているのは御武具蔵のみであることから、出土した海鼠瓦は御武具蔵に使用されたものと判断できます。また、御武具蔵の海鼠壁は斜格子状のもので、その格子目の中にはサイコロの四の目のような四つの白い点があることが分かります。出土した海鼠瓦を見ると瓦の端部に釘穴が空いており、その釘穴の周囲に円形の剥離痕があるものが多く見られるほか、実際に釘穴の上に円形の漆喰が残存している瓦片や、剥がれた円形の漆喰片なども出土しています。このことから、瓦と瓦の間の目地に漆喰を盛って斜格子状にし、さらに瓦の四隅を釘で留め、その上を円形の漆喰で埋めた特徴的なデザインの海鼠壁だったことが明らかになりました。

この特徴的な海鼠壁は意匠性の高いものであり、当時においてもひと際目立った存在の建物だったと思われます。絵図で他の建物に比べても、よりリアルに描かれた感があることや、位置的に大洲藩主の生活空間だった二の丸奥御殿に近いことなどから考えて、何か特別な意味のある蔵だった可能性があると考えられます。今回の海鼠瓦の発見は、この蔵の性格を考える上でも重要な成果となりました。

なお、海鼠瓦の出土は県内の城郭では初めての出土例になりますし、さらに、特徴的なデザインの海鼠瓦についてみれば、町屋などでの使用例が見られますが、城郭内からの出土としては全国的にも珍しいもののようです。

１区の調査成果

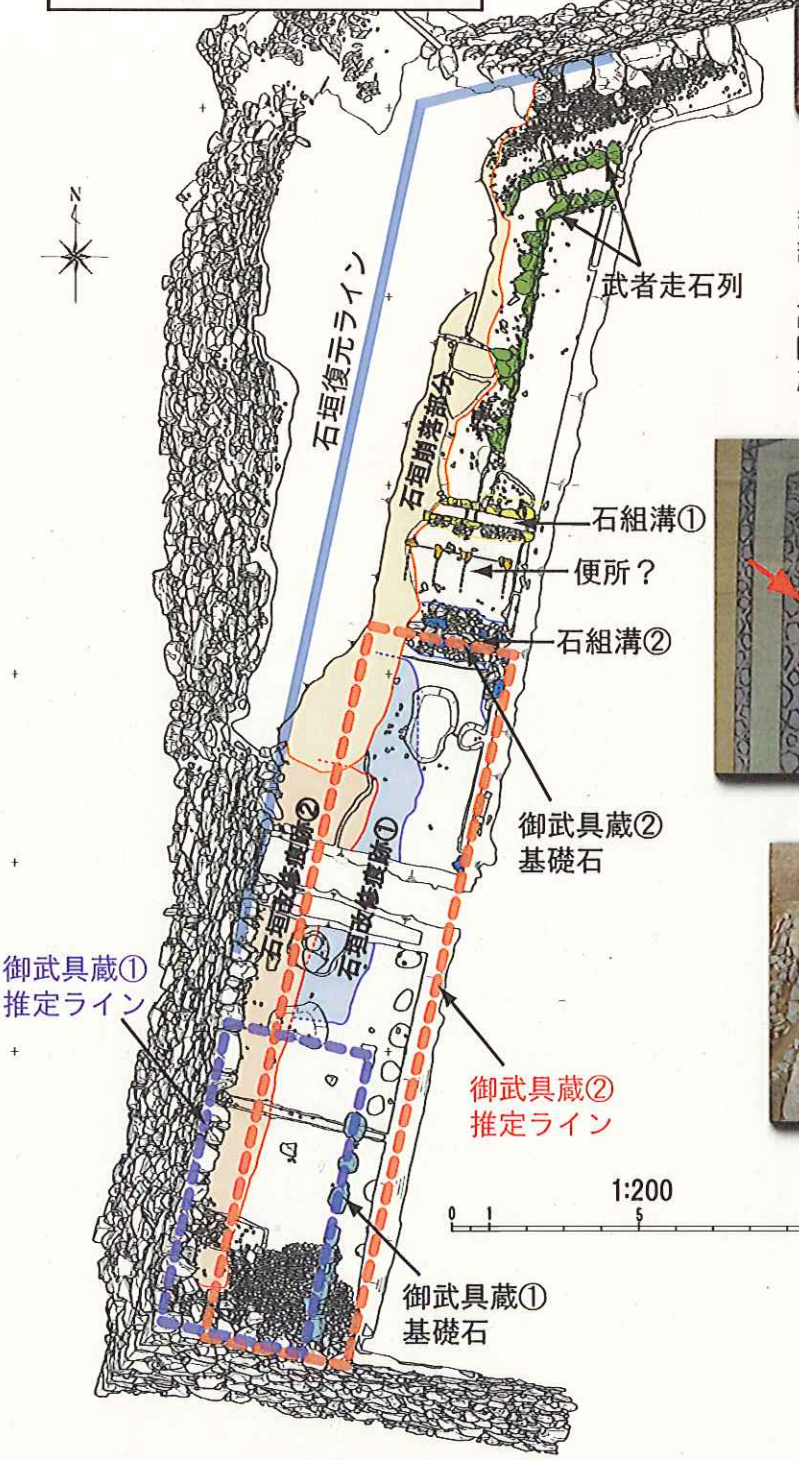
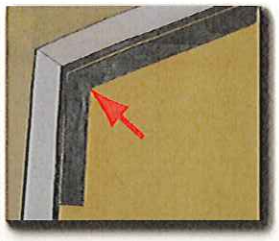


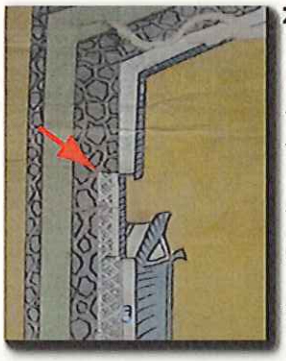
図２　１区遺構平面図　（S=1/200）



２列の石列が発見された武者走

絵図で土塀の屋根が幅広く描かれた部分が武者走になります。武者走とは、土塀内側の城兵の守備位置となる通路部分です。

発見された石列のうち北（石垣）側の石列は、石垣天端の高さからみて２～３段程度抜取られたもので、江戸期には階段状を呈していたと思われます。当初から階段状のものだったか、後から南側の石列が付足されたかは不明です。

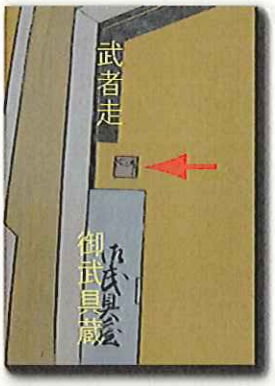


石組溝①

絵図では、本曲輪西面の石垣にはもともと段差があり、北側が一段高く描かれていることから、武者走と石垣が併行して一段高かったものと推定されます。

石組溝①は、武者走石列の南端部にすりつくようにあることから、石垣の段差部分に位置するのではないかと考えています。

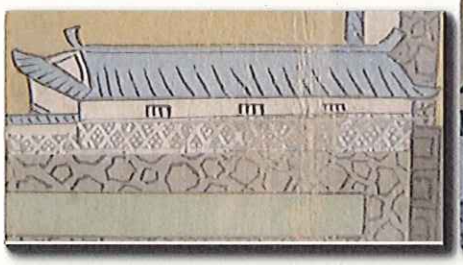
曲輪内の排水を目的とした溝と思われます。

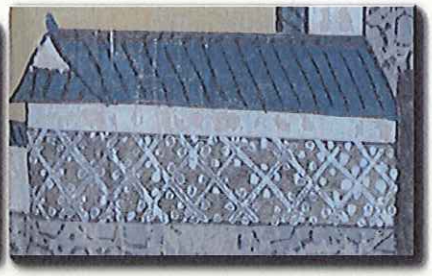


便　所？

石組①と石組溝②の間で小振りな礫が直線的に並んだ部分が確認されました。絵図には武者走りと御武具蔵の間に小さな建物が描かれており「せつゐん」と表記されていることから、便所の礎石と考えられます。いくつかの小部屋に仕切られたものだったと推定されます。

ただ、一部深堀した部分に便槽の痕跡は見られず、当初使われていたと思われる大甕などが抜き取られた可能性があります。

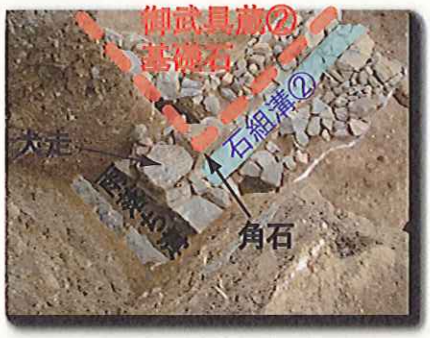




絵図に描かれた「御武具蔵」の海鼠壁

特徴的な海鼠壁がリアルに描かれた２枚の絵図。方形や三角形の海鼠瓦が見られる。

左上：『元禄五年大洲城絵図』（1692 年）
右上：『大洲城下武家屋敷図』（1779～1781 年）
右：現代の町屋の海鼠壁例



石組溝②、「御武具蔵」基礎石②

溝底が石組①とは異なる石貼りのもので、東側には直角に交わる別の石組溝も検出されました。

側石の一辺が御武具蔵の基礎石にあたると考えられ、角石と犬走（いぬばしり）と思われる石も検出されています。

蔵への水の浸入を防ぐことを目的とした溝と思われます。

２区の調査成果

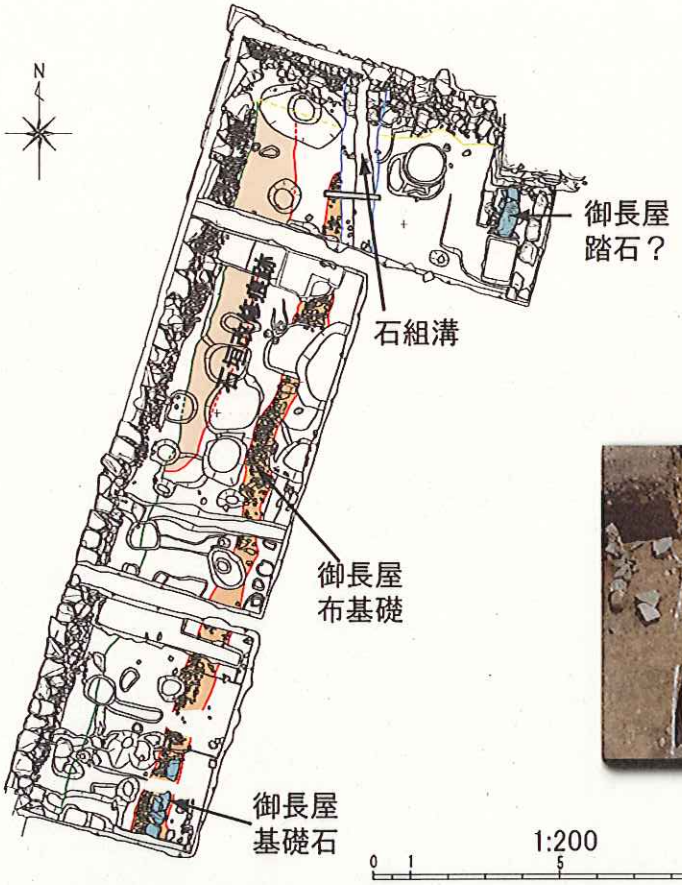
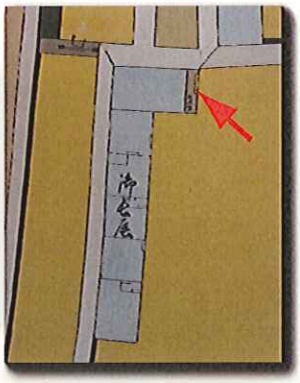


図３　２区遺構平面図　（S=1/200）



「御長屋」の踏石状の平石

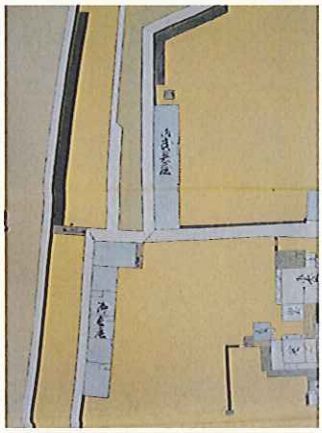
絵図で御長屋の玄関は北東部分にあり、茶色の部分は土間を表しています。

この平石は、玄関の上り口に据え置かれた踏石と考えられます。なお、前面に平石を並べた石列が見られますが、明治以降の溝になります。

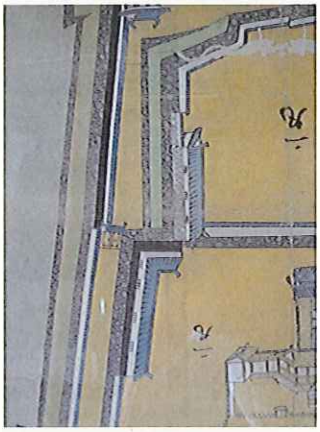
「御長屋」基礎石と南端部分

調査区の南端部で数石の基礎石が検出されました。布基礎内に基礎となる平石を据え、裏側に川原石を詰めたものです。ほとんどの部分で平石は抜取られ、裏側の川原石のみ残った状態で検出されました。

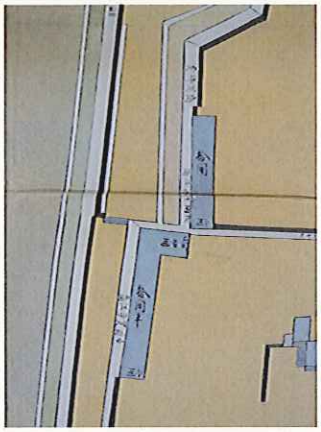
御長屋の南端の角部を確認するため調査区を一部拡張しましたが、基礎石や角石は抜取られており検出されませんでした。しかし、川原石を含んだ布基礎が途切れた箇所が検出され、南側に延びないことが確認されたことから、この部分を御長屋の南端と推定しています。



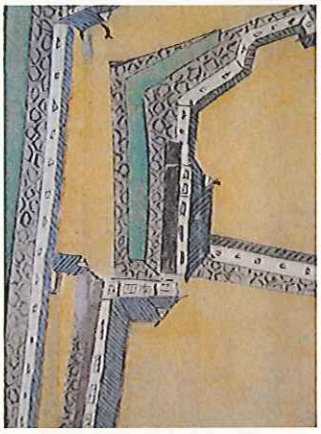
①『御城中御屋形並地割図』



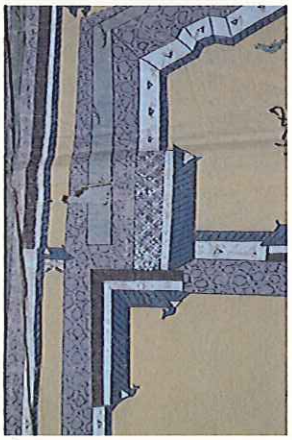
②『元禄五年大洲城絵図』



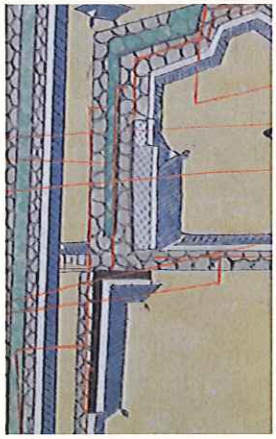
③『御城中御屋形并地割図』



④『伊予大洲城図』



⑤『大洲城下武家屋敷図』



⑥『大洲城石垣普請図』

図４　各絵図での石垣A箇所

①元禄5(1692) 年 / 個人蔵
②元禄5(1692) 年 / 大洲市立博物館蔵
③江戸前期 / 個人蔵
④寛延2(1749) 年 / 個人蔵
⑤安永8(1779) 年～天明元 (1781) 年頃 / 個人蔵
⑥文化8(1811) 年 / 個人蔵